

浪江の

こころ通信

・第64号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第64号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





田村 善孝さん(井手)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：8月11日

いわきには、大勢の仲間がいて心強いです



▲お父さんが大好きなのですね。親子で素敵な笑顔を見せてくださいました。

震災後に結婚した梓^{あずさ}さんと、息子の彪^{ひゅうが}君と3人、いわき市内の新しいお家での暮らしが始まっています。明るい陽射しが差す家の中を、3歳になる彪君が活発に走り回っていました。

◆3・11東日本大震災、翌日の福島第一原発事故。あの日、あの時、どうされていましたか
高校の卒業式は終わっていて、「寿し松」でバイトをしていたので、震災の当日も午前中から午後2時まで仕事をして、浪江中学校の近くの友人宅に寄っていました。その日は、父の車を借りて出かけていたので、一緒にいた同じ野球部の友人たちを乗せて、地震で隆起したり亀裂が走ったりしている道を荻野や川添まで送り届けながら、家に帰りました。

家の蔵は崩れ、平屋の家の中は落ちてきたものなどで足の踏み場もないほど散乱していました。夕方に父と連絡が取れるまで、祖父と二人きりでした。その晩は停電・断水している状況で、居間を片付けて雑魚寝をしました。眠れずに早起きして犬の散歩をしていると、5時くらいだったと思いますが、防災無線で原発事故に伴う避難の呼びかけがあり、津島へ向いました。避難所は既にいっぱい、川俣町まで移動しました。リオンホールで食料などを買い求め、再び津島へ戻りました。

◆田村さんのその後をお聞かせください
僕は、震災前に就職先の内定を受けていたので、3月末には

新潟県で入社手続きをして、そのまま着任し3年間を過ごしました。私生活では、当時付き合っていた妻と結婚し、息子が生まれました。その後、新潟から福島に転勤となり、いわき市内郷に移りましたが、今年春にこの家が完成し、転居しました。会社では約2時間弱かかりますが、通っています。勤務先や協力会社、またいわき市内にも、高校野球部の仲間や先輩、後輩が結構いるので、よく会います。特に、近所に住む親しい友人たちや浪江の友人とは、月2〜3回は「宅飲み（自宅での飲み会）」をすることが多いですね。妻も、みんなが来てくれることを楽しんでいくようです。

浪江町で安心して暮らせるようになるまでには、おそらく10年以上かかるでしょうから、町に戻ることは、今は考えられません。3歳になる息子も、このいわき市の家で成長するのだと思っています。



木幡 四郎さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：8月10日

復興に向かって気持ちを一つにしたい



▲優しい笑顔の木幡四郎さん・美智代さんご夫婦

町田市に避難し、被災当事者団体『サロンFMI会』を立ち上げた木幡四郎さんに、今の暮らしと今後への思いをお聞きしました。

◆「こうしようか！」と震災直後は「いいいの村」に避難、その後、津島の避難所に近所の人たちと一緒に移動しました。津島には二晩いましたが、原発事故の故のことで頭にはなく、できるだけ避難所生活の負担を和らげようと、仮設トイレを作ったり、班制度を設けたりしました。災害時には、待っているだけでは駄目だと思います。「こうしようか！」と言いつつ出ることが大事です。警察の指示を受け津島の避難所を出た後、東京に住む子どもたちと連絡を取り合い、栃木、八王子、府中を経て町田に避難してきました。

◆会の役割が広がる
震災から5年を過ぎ、地域での出番が増えてきました。昨年12月には、田舎でやっていた餅つきを経験を活かして、東京近郊の団体と一緒に「餅つき大会」を開催。400名もの参加がありました。また、手作り品を販売し、大島や熊本といった

◆「こうしようか！」と震災直後は「いいいの村」に避難、その後、津島の避難所に近所の人たちと一緒に移動しました。津島には二晩いましたが、原発事故の故のことで頭にはなく、できるだけ避難所生活の負担を和らげようと、仮設トイレを作ったり、班制度を設けたりしました。災害時には、待っているだけでは駄目だと思います。「こうしようか！」と言いつつ出ることが大事です。警察の指示を受け津島の避難所を出た後、東京に住む子どもたちと連絡を取り合い、栃木、八王子、府中を経て町田に避難してきました。

◆本音の話がしたい
私は、町田市に中古の一戸建て（仮住まい）を求めました。中古でも庭のある家に住みたかったのです。今では、会の役員会も自宅で行っています。浪江にいた頃は、近所づきあい、親戚づきあいが盛んでしたから、人づきあいは苦になりません。会を運営する中で、復興に関しての情報もたくさん得ることができ、ますます。ただどうしても、表に出る話は真実味が欠けます。もつと本音の話を聞きたい。そうすれば、みんなの復興に向かう気持ちが一つになるのではと思います。浪江にできる「道の駅」は情報基地としての役割も担うと聞きます。交流の場、意見交換できる場として期待しています。

被災地に恩返しの意味を込め、寄付も行いました。新しい住まいを関東近県に求める人たちが目立ってきました。転居した先では、また新たな関係を作らなければなりません。『サロンFMI会』のメンバーの転居先の支援団体と共同で企画を実施することが増えてきました。先日、神奈川の「歩む会」との共催で、バスハイクを実施しました。チラシだけでは参加者は集まりません。「一緒に行こう」という声かけがあれば安心して参加できます。『サロンFMI会』のネットワークが活きるのです。



小川 昌幸さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：9月1日

なみえの皆さんと近況を語り合いたい！

震災前は、浪江駅前の権現堂で理容店を営んでいた小川さん。今年6月に、福島市佐倉下に新築した自宅兼店舗に引っ越されました。

現在は、理容店を夫婦で営み、家族6人で新しい生活を始めておられます。



◆**仮設住宅の理容店に通って4年半**
理容店は私の代からはじめました。お客様は、子どもから高齢者まで幅広いですが特に中学生から青年の年代の方たちが多かったですね。工夫していたのは待ち合いうスペース。リラックスできるように配置し、いろんな種類の飲み物を置いていました。
震災直後は、赤宇木、会津若松、そして妻の実家がある秋田へと避難し、2011年4月に福島市にある雇用促進住宅に入居することができました。入居当初は、同じように避難している浪江の皆さんが「私の頭をさっぱりしてくれ」と自宅を訪問してくれました。もちろん理容道具はありませんから、湯沸し温水器のお湯を使って台所で散髪をしたことも。その後、2011年11月には福島市飯坂町にある北幹線第一仮設住宅の理容室で

◆**同級生との交流が励みに**
私は、浪江中学校の同級生たちと「羊猿会」を結成し、時々集まっています。名前の通り、昭和42年と43年生まれの同級生たちです。現在のメンバーは約20人。不思議なもので、お互い大人になってから平成7年頃に結成。はじめは飲み会がきっかけでした。規約もつくり、会費も集めて運営しています。飲み会や宿泊の企画の際には、近況を語り合ったり、出来事を報告したり。昨年は日光に出かけ、今年は平泉に行く予定です。これが楽しみでもあり、ほっとできる大切な時間でもあります。現在の店をオープンした時も祝ってくれて、本当に感謝しています。
◆**今後への不安**
雇用促進住宅に住み、仮設に通って5年が過ぎ、あっといふまの時間でした。これからの浪江の家のことを考えると不安です。浪江には、自宅と店舗、そして実家があります。「避難指示が解除され戻れるようになった時どうするか」は考えてもなかなか答えが見つかりません。もし浪江で



BARBAR 髪鉄
福島市佐倉下字上谷地8-1
☎080(5225)1288
福島西インターから車で約5分
できればご予約してご来店ください



山田 拓樹さん(牛渡)

取材者：浪江町役場 佐々木・嶋原
取材日：8月24日

離れていても、浪江町は故郷



▲今年成人式を迎えたフレッシュな笑顔の山田さん

公務員を目指し、仙台で大学生活を送っている山田さん。自らの希望で、インターン先を浪江町役場に選びました。

意欲的に将来へ向けて動いている山田さんに、これからの抱負と浪江町への想いを伺いました。

◆**公務員を目指し頑張っています**
大学生活では、中学・高校と続けていたテニスのサークルに入り、充実した時間を過ごしています。大学での友達もできて、一人暮らしならではの楽しさを満喫しています。身の回りのことは自分でやらないといけないので、大変ですが。

◆**卒業式当日に震災**
大震災が起きたのは、中学卒業の報告をしに母と兄との3人で南相馬に住む祖母のところへ行った帰りのことでした。家族は全員無事でしたが、浪江の自宅の1階が潰れてしまったため、着の身着のまま祖母の家に避難。その後、桑折町の親せき宅、二本松市のアパート、福島市のアパートと避難先を変えました。そして、大学入学を機に仙台でひとり暮らしを始めました。

◆**浪江町内の様子や役場本庁舎での業務再開の様子も見学できましたし、仮設住宅を訪問して町民の方と触れ合う経験もできました。この1週間のインターンシップの間に経験したことを忘れずに、将来へつなげていければと思います。**

◆**浪江町内の様子や役場本庁舎での業務再開の様子も見学できましたし、仮設住宅を訪問して町民の方と触れ合う経験もできました。この1週間のインターンシップの間に経験したことを忘れずに、将来へつなげていければと思います。**

◆**思い出を胸に将来へ**
浪江でのいちばんの思い出は、中学校時代の3年間でですね。学校生活や友達との思い出がたくさんあります。十日市はとても楽しみでした。
震災後は、放射線だけでなく生活環境が大きく変わったことへの不安がありました。特に、高校へ入学するまでの2か月間は不安が大きかったです。その頃、友達とのやりとりの中で、浪江東中学校の卒業生が多数、福島西高へ入学すると聞いて福島西高への入学を決めました。高校では勉強・部活にのびのびと取り組んで新しい友達もできました。浪江の友達とは離れ離れになってなかなか会えないですが、やりとりはこれからも大切にしていきたいです。

◆**浪江に行くのはお墓参りのときくらいで、今のところ浪江に戻るとは考えていません。ここからは夢の実現へ向けて頑張っていきたいと思っています。でも、離れて生活していても浪江町は故郷です。たとえ以前と同じ浪江町の姿ではなくても、この思いは変わりません。**

◆**浪江に行くのはお墓参りのときくらいで、今のところ浪江に戻るとは考えていません。ここからは夢の実現へ向けて頑張っていきたいと思っています。でも、離れて生活していても浪江町は故郷です。たとえ以前と同じ浪江町の姿ではなくても、この思いは変わりません。**

◆**浪江に行くのはお墓参りのときくらいで、今のところ浪江に戻るとは考えていません。ここからは夢の実現へ向けて頑張っていきたいと思っています。でも、離れて生活していても浪江町は故郷です。たとえ以前と同じ浪江町の姿ではなくても、この思いは変わりません。**